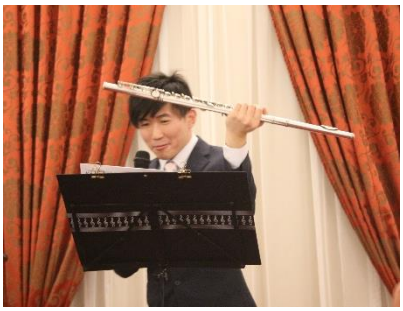
会報
札響くらぶ
2020年 3月 第89号
編集・発行／札響くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

第28回札響くらぶサロン

フルートの魅力 ここに極まる

新年最初の札響くらぶサロン、第1部は八木幸三顧問による来期札響定期演奏会の聴き所と楽曲解説、更に今回は会場の皆さん参加型のクイズ形式での聴き比べとなった。毎回趣向を凝らした構成、聴く者を飽きさせない軽妙な語り口。八木顧問のお話そのものが、聴き所と感じさせる、機知に富んだ中身の濃い第1部だった。

第2部は、先頃副首席に就任されたフルート奏者川口晃さんによるミニコンサート。ゴーベールにクヴァンツにアンデルセンにベーム、過去の偉大なる笛吹き達の競演は、笛吹きによる笛吹きの為の何とも魅惑的なプログラム。ピアノ伴奏は川口さんとは芸大時代の同級生だったという、サロンではお馴染みの永沼絵里香さん。サロンでは珍しく無伴奏2曲を含め、普段はあまり聴けないピッコロでの演奏も披露された。極めつけはやはりベームの「グランド・ポロネーズ」だろう。ご自身でも解説されていたがベーム式フルート（現在のフルートの原型）の考案者でもあり、フルートの構造を最大限に生かした華やかでかつ技巧的な調べは本日の白眉と言えるひと時だった。


これがいつものフルート

厚みのある低い音色のアルトフルート

時に、川口さんと言えば御承知のように、アルトフルートの名手である。昨年3月の定期演奏会、ストラビンスキー「春の祭典」でのアルトフルートは忘れられない名演として私の記憶に色濃く残っている。今回はオペラ「カルメン」から第2幕最大の見せ場、ホセのアリア「花の歌」をアルトフルートで聴けるというではないか！ 少しだけ太い輪郭、厚みのある物憂げな音色が美しく研する。すぐさまホセを演じたプラシド・ドミンゴの歌声が私の中で脳内再生され、アルトフルートを追いかける。この曲のスコアはご自身で、アルトフルート用に組み直されたとの事だった。

演奏会のご案内 永沼さん

サロンでの演奏会を聴きながら毎度思うのは、出演される皆さんの、音楽家として音楽に向き合う真摯な姿勢。一切の妥協を許さず高みを目指すストイックさ、そして自らも音楽を非常に楽しんでいらっしゃる。個々の音楽的資質の向上が、ここ数年の札響全体の飛躍的な進化の一因となっているのは間違いのない所ではなかろうか。

第3部の交流パーティの冒頭、札響くらぶの根幹事業の一つである楽譜支援金（目録）が鈴木美穂札響くらぶ会長代行より鳥居和比徒札響専務理事へ贈呈された。その後、演奏を終えた川口さんと永沼さん、カルメンのリハ後にもかかわらず駆けつけてくれた、トランペット副首席の鶴田麻記さんも参加され、交流パーティーへ。今回も「暮らしのアトリエ」さん提供の目にも麗しく新春らしいおせち風味なお料理とスパークリングワインで乾杯！ 毎年恒例ニューイヤースペシャルイベントとして、札響メンバー6名＋永沼絵里香さんの直筆サイン入り札響オリジナルカレンダー争奪じゃんけん大会も行われ、巻き起こる歓声と共に大いに盛り上がった新春の宴であった。

会員／吉川宗男

イラスト・会員／浅井律子

4月～5月 定期演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

第628回定期演奏会
4月24日（金）19：00
25日（土）14：00
指揮　マティアス・バーメルト
ピアノ　デジュー・ラーンキ

■ドビュッシー
牧神の午後への前奏曲

それまでほとんど無名だったドビュッシーは30歳の時にこの作品を発表し一躍名声を上げる。フランス印象派詩人マラルメの家に出入りしていたドビュッシーは、そこで多くの詩人や画家と出会い大きな影響を受ける。マラルメの象徴詩「牧神の午後」を下敷きに、半音階的な和声による曖昧で繊細なニュアンスの幻想味豊かなこの作品は、作曲者が印象派音楽家と呼ばれる出発点となった。

マティアス・バーメルト

■バルトーク
ピアノ協奏曲第3番

ピアノの名手でもあったバルトークは、教育的目的のものから超絶技巧を必要とするものまで多くのピアノ作品を作曲し、協奏曲は3曲残している。この第3番はアメリカ時代において、白血病だった彼が亡くなる年に書かれた。最後の17小節は弟子であったティボール・シアリーが作曲者の指示により完成させている。そして、この協奏曲はバルトークの2番目の妻ディッタ・パーストリーへ贈られた。先の2つの協奏曲と違い、作品の内容は急進的なものではなく、死を目前とした心境からか古典的な作風となっている。

第1楽章はピアノをそれまでの打楽器的な扱いではなく、温和で優美なピアニズムで聴くことができる。天国へ昇華するような宗教的瞑想を感じさせるアダージョ楽章の後、ハンガリーの民族的色彩が濃い第3楽章へと進む。

デジュー・ラーンキ
©飯島隆

■リムスキー＝コルサコフ
交響組曲
「シェエラザード」

東映動画の「シンドバットの大冒険」や手塚治虫の映画「千一夜物語」など「アラビアン・ナイト」の物語は、昔から映画や絵本などで親しまれている。この交響組曲「シェエラザード」も壮麗なオーケストレーションにより「アラビアン・ナイト」の神秘的で極彩色な物語絵巻が描かれている。4つの物語による4つの楽章で構成され、物語に関連性はないが威厳に満ちた荒々しい「シャリアール王の主題」とヴァイオリン独奏によって奏でられる美しい「シェエラザードの主題」が、全楽章を通して有機的に用いられ、作曲者の実力が遺憾なく発揮された名曲となっている。

第629回定期演奏会
5月15日（金）19：00
16日（土）14：00
指揮　オッコ・カム
ヴァイオリン　神尾真由子

■シベリウス
「ベルシャザールの饗宴」組曲

原曲はヤルマル・プロコペの同名の戯曲に付けられた付随音楽で、シベリウスは8曲を管弦楽化させた。その中には歌が入るものもあり、初演は1906年11月にヘルシンキのスウェーデン劇場において、作曲者自身の指揮で行われ、その後多くの上演を重ねた。この付随音楽から管弦楽のみの組曲としたのがこの作品で、「東洋の行進曲」「孤独」「ノクターン」「カドラの踊り」の4曲からなっている。

■シベリウス
ヴァイオリン協奏曲

若き日にヴァイオリニストを夢見ていたシベリウスは、この楽器の扱いにも大変長けていた。優れた交響曲や交響詩を書いたシベリウスはこの曲においても交響的色彩の強いものを書いたことは当然だが、独奏楽器の特性を十分に発揮させ、シベリウス以外の何者でもない独創性溢れる作品に仕上げている。特に第1楽章ではソナタ形式の枠を超え、カデンツァを中央においた独特の構成で情緒の底深さを幽玄に表現している。

この曲は叙情的な旋律とラプソディーな曲想で、女性ヴァイオリニストに人気があるのか、筆者も加藤知子、竹澤恭子などの演奏を聴いてきた。今回は作曲者の母国フィンランドから名匠オッコ・カムの指揮で神尾真由子が北欧のロマンを奏でてくれる。

オッコ・カム
©Kappo Kamu

神尾　真由子

■シベリウス
四つの伝説曲
（レンミンカイネン組曲）

フィンランドのカレリア地方を中心として、吟遊詩人や農民、漁師たちの間で語り継がれてきた一大文学遺産が「カレワラ」である。シベリウスは少年時代から民族叙事詩「カレワラ」に親しみ、「クレルヴォ交響曲」をはじめ多くの「カレワラ」にもとづく作品を生み出した。この「カレワラ」には多くの英雄たちが登場する。その一人レンミンカイネンは「北欧のドン・フアン」ともいうべき、好色で冒険好きな英雄で、「四つの伝説曲」は彼の物語をもととして書かれた。

第1曲はサーリの島で花嫁探しをするレンミンカイネンが描かれ、第2曲は黄泉の国トゥオネラに流れる黒い河の水面に浮かぶ白鳥を描いたもので、北欧の神秘的な抒情がにじみ出た名曲として単独でも演奏されることが多い。

第3曲は主人公が求婚に失敗した悲運な結末が描かれ、第4曲は母親によって蘇生し帰郷する姿が描かれている。

h-itaruシリーズ
新・定期演奏会
5月28日（木）19：00
指　揮　秋山　和慶
ピアノ　藤田　真央

秋山　和慶

■近衛秀麿
越天楽

近衛秀麿はエーリヒ・クライバーに指揮を学び、山田耕筰と共にN響の前身である新交響楽団を創設、ベートーヴェンやマーラーの交響曲を日本初演するなど日本のオーケストラ育成に大きな功績を残した。作曲家としても昭和天皇即位時の祝典カンタータや歌曲などを作曲しているが、編曲作品も多く残している。彼は皇室内で雅楽を統括する家柄と言うこともあってか、雅楽「越天楽」を見事なオーケストレーションで編曲している。龍笛をフルートに、篳篥（ひちりき）をオーボエに、笙の玄妙なハーモニーをヴァイオリン合奏に置きかえたその典雅な管弦楽曲は、モスクワでの初演をはじめ内外50都市以上で演奏され、雅楽を世界的に紹介したと言っても良い。

■ラフマニノフ
ピアノ協奏曲第2番

ラフマニノフは幼少期豊かな森と美しい湖のあるノヴゴロドで過ごし、そこで夜ごと教会の鐘の響きで感性をふくらませたと言う。彼の作品の中でも最も有名なこの曲は、第1楽章の冒頭で重い鐘の和音がピアノにより奏でられ、哀愁に満ちた濃厚な旋律がとうとうと流れ出す。純愛映画の背景にぴったりの甘い名旋律を聴くと、若かりし日の青春のときめきが蘇ってくるようだ。今、TVでも大人気の俊英、21歳の藤田真央がこの曲からどんなピアニズムを聴かせてくれるのか大注目だ。

藤田　真央

■ブラームス
交響曲第1番

ベートーヴェンを意識しドイツ音楽の真正なる後継者をめざしたブラームスが、ベートーヴェンと同等かそれ以上の交響曲を書くために二十余年の歳月を費やして作り上げたのがこの第1番である。この曲は確かにベートーヴェン風の交響曲である。悲劇的・闘争的なハ短調で始まり、最後の楽章はハ長調で終わるという「暗黒から光明へ」という「運命」的構成、第1楽章の短い基本動機からの発展、第4楽章の「歓喜の歌」を想起させる旋律など理由はいくらでもある。しかし、この曲はまさにブラームスそのものの楽想なのだ。曲全体は北ドイツ人らしい暗さと深さを最後まで持ち続け、ブラームスらしい意図的にずらされた拍とフレーズがある。この曲を43歳にして完成させたブラームスの苦悩とあきらめ、さらには喜びという人生の深遠が彼自身の人間味と重なって創出される。

（写真協力　札幌交響楽団）

2019年度　楽譜支援金　贈呈

先日（1月18日）開かれた札響くらぶサロンのニューイヤーパーティーにおいて、札響くらぶから札幌交響楽団へ2019年度の「楽譜支援金」として50万円が贈呈されました。

札響ライブラリアンの中村大志さんにお話をうかがったところ、「今年度は購入する必要のある楽曲が少なく、この3曲の中ではシベリウスだけが購入楽譜で、あとはレンタル譜です。どの楽譜も2020年度の定期で使用するものばかりです。」とのことでした。

あわせて中村さんからは楽譜についての、興味深いお話をお聞きすることができました。

①楽譜の値段は一般に購入楽譜の場合、交響曲のような長い曲でスコアとパート譜を合わせて10万円程度、短い曲で3万～5万円程度のものが多い。

②楽譜を購入する際、パート譜は管楽器、打楽器、ハープなどは1部ずつ、弦楽器はヴァイオリンから順に8部、7部、6部、5部、4部とオーダーすることが多いが、基本的には必要な部数を購入する。

③一度使用して書き込みがある楽譜を次に使うときは、前回の書き込みで明らかに必要のないものは消して、必要なことがあれば書き足している。

また、札響の楽譜予算総額については、「最初に予算ありきで購入する曲目を決めるわけではないので、一概に示すことは難しい」ということでした。

担当／村山

2019年度　札響くらぶ楽譜支援金　支出内訳

1	ストラヴィンスキー	ペトルーシュカ	264,385円
2	バルトーク	ピアノ協奏曲第３番	206,910円
3	シベリウス	レンミンカイネンの帰郷	29,700円
		合計	500,995円

楽員さんに興味津津 ㉔

トランペット副首席奏者 鶴田麻記さんに聞く

オケの勉強を優先しています

♪ 色々な楽器を巡ってトランペットへ

出身は釧路です。通っていた地元の美原小学校には金管バンドがあったので、3年生の時に入部しました。母がピアノを教えていて、私も5歳くらいから母の知り合いの先生にピアノを習っていました。金管バンドの先生に「じゃあ、鍵盤楽器もすぐ出来そうだね」と言われて、1年弱くらい打楽器の鍵盤楽器を担当しました。そうしているうちに今度はホルンに空きができたので、アルトホルンへ。ユーフォニアムを小さくしたような楽器です。5年生からはトランペットに空きができて、また先生に言われるままにトランペットを担当することになりました。そうして始めたトランペットが自分には合っていたようで、6年生でソロコンクールに出場する際にトランペットを祖父に買ってもらい、中学校、高校でも吹奏楽部に入り、トランペットを続けました。

中学校の時は、高校を卒業したら楽器の修理を学ぶ専門学校に行こうかなと思っていました。将来は楽器店に就職して管楽器をリペアする人になりたい、楽器や音楽に触れていたいとなんとなく思っていました。

釧路から札幌へレッスンに行くようになったのは高校2年生の終わり頃です。高校の時は、音楽の先生になるのもいいなあ、岩見沢の教育大に進もうかなと思うようになりました。実技試験があるので釧路北陽高校の中野先生に、当時札響の副首席トランペットの松田次史先生を紹介していただきました。高校の吹奏楽部もしながら、1か月に1度通い、遠方からなので特別に1回に2時間弱くらいのレッスンをして頂きました。電車の往復だったので大変でしたが、先生と家族のお陰で通い続けられました。進路を考える頃、松田先生には東京藝術大学を勧められました。私は芸大のことは何も知らなかったのですが、松田先生の母校ならば、と受けてみようかと思いました。両親もそんなことは予想していなかったと思います。ただ「頑張れ」と応援してくれました。ピアノも中学校、高校では部活が忙しくてあまり触れていなかったのですが、芸大受験に向けて、ソルフェージュと共にまた真剣に練習を始めました。

小学校の時「宝島」のアルトサックスソロを
トランペットで演奏

♪ ラッパ科は女子ばかり

芸大では同学年にトランペットは4人と別科が1人、全学年合わせると20人弱でした。トランペット科は、女の人が多かったです。吹奏楽部も女子ばっかりだったので、大学も自然と女子が多くなっているのだと思います。

芸大では個人レッスンや吹奏楽、オーケストラの授業がありました。アンサンブルのレッスンというのもあり、メンバーを集めて金管五重奏をたくさん演奏して勉強しました。「ラッパ科合宿」という、コンクールやトランペット科の演奏会に向けての合宿もありました。大学時代は毎日毎日、授業と練習で大変でした。寮に住んでいましたが、そこの練習室を借りたり、学校で吹いたりして練習ばかり。東京生活はあんまり楽しめてなかったかもしれません。

3年生、4年生の頃は、アマチュアのオーケストラや学生同士のアンサンブルに呼んでもらったり、4年生になってからは先生にプロのオーケストラにエキストラとして呼んでもらったりしていました。4年生くらいからコンクールでも少しずつ入賞することが出来るようになってきました。

エキストラでいらっしゃった
松田先生と一緒に

プロフィール

北海道釧路市出身。東京芸術大学器楽科を卒業。第84回日本音楽コンクール第2位、プラハの春国際コンクール2016にて入選、奨励賞など国内外のコンクールにて入賞。松田次史、栃本浩規、菊本和昭、佐藤友紀、古田俊博の各氏に師事。現在札幌交響楽団副首席奏者。

♪ 北海道に帰りたい

オーケストラ奏者になることを目標に頑張っていたので、いくつかのオーディションを受けました。もし東京のオケに入っていたとしても、移籍するチャンスがあればいつかは札響に入りたい、北海道に帰りたいと、きっと思ったと思います。そんな時に松田先生が引退するということで、5月に札響のオーディションがあるということを知りました。3月に芸大を卒業してから、国際コンクールを受けたり、エキストラをしたりしましたが、それが結果的にオーディションのための準備になっていたと思います。9月から試用期間になり、翌年の3月に正式団員になりました。

団員になってから、嬉しいことに釧路の公演ではフンメルのトランペット協奏曲をソリストとして演奏させて頂きました。釧路の定期公演は松田先生が出ているときにいつも聴きにいっていました。自分がこうしてステージに立つなんて。

札響は居心地が良くて楽しいです。大変な時もいっぱいあるけれど、札響が大好きだし、管楽器の方たちはみんな上手で良い人ばかりです。私は経験が少なく知らない曲ばかりなので、もっとオーケストラの勉強を頑張りたいと思っています。文化庁の演奏会などでアンサンブルをする機会がありますが、少人数だとよりメンバーのことがよく見えたり、聞こえたりする楽しさがあります。

演奏旅行の時
大平まゆみさんを囲んで女子会

釧路で フンメルの
トランペット協奏曲を演奏

札響は旅行演奏があるので絆が深まると思います。車に乗せてもらって、函館、稚内、釧路、帯広など色々な所に行きました。初めて行くところもいっぱいあるので楽しみです。

♪ ケースの中はB管とC管

札響くらぶサロンのミニコンサートの時にいろんなトランペットをご紹介しましたが、今持っているケースの中には、B管とC管の2本が入っています。主にオーケストラではC管を使っていて、曲によっては持ち替えることもあります。低い音が出てきた時はB管にすることもあります。運指は同じですが、B管は「ド」って出した時にBフラットが出ます。ほかには小さいピッコロトランペット。これはバッハなど、バロックの曲に良く使われる楽器です。あまり見かけないフリューゲルホルンもトランペットの仲間ですが、吹奏楽などで使われたりしています。

トランペットはピストンの動きが急に悪くなって上がってこなくなることがあるんです。ミュートがうまくはまらなかったり、譜面台はネジが緩んでストンと落ちてしまったり、アクシデントもオーケストラにはつきものです。

趣味というわけではないのですが、実はピカチュウが大好きで、マスコットもたくさん持っています。ゲームもやります。料理も好きで、簡単なものですが時間があるときに作っています。飲み会も好きです。スポーツは全然やっていませんが、札響のメンバーとフットサルをたまにやっていて、皆で揃えたユニフォームも持っています。

♪ 大編成の曲に挑みたい

トランペット奏者で尊敬している人はエリック・オービエ（フランスの奏者）、ガボール・タルケヴィ（ベルリンフィル首席奏者）、アリソン・バルサム（イギリスの女性奏者）。オービエは東京でレッスンを受けたことがあります。出す音もすごいし、テクニックもすごい。音に厚みがあって、楽器がいっぱい鳴っているなあと思います。

作曲家ではドヴォルザークやチャイコフスキーなど、メロディが美しい作曲家が好きです。札響に来た指揮者ではバッティストーニが印象に残っています。hitaru のこけら落としで演奏したアイーダが初めてのオペラだったのですが、演奏していてとても楽しかったです。昨年のジルベスターで共演したトロンボーンの中川英二郎さん、ピアノの小曽根真さんはジャズとクラシックを共存させた素晴らしい演奏を聞かせてくださいました。

Kitara はもちろん本当に最高のコンサート会場です。これからは hitaru でもコンサートをたくさんすることになりますが、アクセスもいいので皆さんも来やすいと思います。オペラやバレエもできるので、札響も忙しくなると思いますが、今から楽しみです。

これから演奏してみたい曲は編成が大きくて派手な曲です。今年の大きな編成の曲は4月の序曲「1812年」や、11月定期で演奏するマーラー「交響曲5番」です。あとは今後ヤナーチェクのシンフォニエッタやモーツァルトのレクイエムなど、そういう編成の大きい曲を、色んな人達と演奏できたらなと願っています。

こけら落とし アイーダ トランペット隊と

マーラーの歌曲を追いかけて　札響東京公演

19世紀と20世紀をつなぐ最大の作曲家として、西洋音楽史の要に位置するG・マーラー。しかし今日では、彼の音楽は前衛性よりも世紀末ウィーンの陰影が発する、濃厚で耽美的なロマン性のために僕たちにはすっかりなじみ深い存在となっている。それも歌曲と交響曲との境界線を放浪しつつ、両者を統一するようでできないもどかしさを漂わせながらである。

そんなマーラーが、18世紀、19世紀のドイツを生きたF・リュッケルトの詩に素敵な音楽を添えたのが「亡き子をしのぶ歌」である。R・シュトラウスの「四つの最後の歌」などと同様、大編成のオーケストラをともなうこの歌曲の吸引力は強く、僕をサントリー・ホールの札幌交響楽団東京公演まで呼び寄せることにもなった(2月7日)。

きめ細かな羽毛で頬を撫でられるような、弦楽器の柔らかな感触。

当夜の演奏は世紀末ウィーンの頽廃をことさら強調することなく、純音楽的な美しさを浮かび上がらせるものであった。弦楽器の丸みをおびた、繊細な響きが会場の隅々にまで浸透し、作曲者が彼独特の音階に託した諦念と「滅びゆくもの への郷愁」の念はでしゃばることなく背後でひっそりと呼吸していた。指揮者バーメルト氏の知的なドライブに拍手を送りたい。加えて切なさを昇華させたオーボエの調べと、第5曲「こんな天気に」In diesem Wetter におけるチェロ・パートの溢れんばかりの歌心(特に128小節以降)が聴く者の心を捉えた。マーラー美学に彩りをそえたハープのうつろな表情も極めて印象的であった。

メゾ・ソプラノあるいはバリトンで歌われることの多い独唱部分は、今回はドイツのバリトン歌手D・ヘンシェルが担っていた。僕の好みからすれば、なめらかに流れる旋律線を求めたかったものの(2月2日の「美しき水車屋の娘」も同様であったが)、語りに傾斜した芸の深さは説得力に富み、それを弦楽器が柔らかく包み込んでいた。

弦楽器の輝きは、それにとどまらず、第1曲目のドイツ舞曲(シューベルト作曲=ヴェーベルン編曲)から会場の最深部までなめらかな放物線を描いていた。2月1日に既に札幌コンサートホールで確認済みだったとはいえ、精緻で暖かい響きが聴衆の耳に心地よい刺激を与え、当夜のコンサート全体への関心を呼び込んだことは間違いないであろう。

（写真協力　札幌交響楽団）

ベートーヴェンの第7交響曲も冒頭のイ長調トニカの和音から弾力に富み、札響の弦楽器の優秀さを証明していた。そして、アンコールで提供されたモーツアルトのカッサシオンK63（アンダンテ）の天国的な佇まい。さすがザルツブルグ・モーツアルテウム管弦楽団に在籍したことのあるバーメルト氏、ディヴェルティメントやセレナードなど今後の演奏会に期待を膨らませるのは僕だけではないだろう。

翌2月8日、東京のオーケストラを聴くために僕は前日と同じ会場に出かけた。十数時間前に札響を聴いた耳には、弦楽器の音がやけに硬く響いた。

会員／村岡範男

札響くらぶサロン　もうひとつの楽しみ

「札響くらぶサロン」では、毎回「交流パーティー」を開いています。そこで供されるオードブルをここ数回「暮らしのアトリエ」さんにお願いしています。主宰者の上野愛さんにコメントをいただきました。

昨年5月の札響くらぶサロンにオードブルをケータリングさせていただいて以来、皆様とは料理を通じてお世話になっています。普段は自宅で月に数度の料理教室を開いていて、ジャンルの問わない、普段に寄り添えるお料理とそれに合うお酒、テーブルコーディネート、そのシチュエーションに心地よい音楽を紹介しています。ケータリングはもっとも気を使うもの、気温気候によっても左右され、皆様のお口に入る時間なども考慮してメニューを決めています。もちろん季節の旬のものなども取り入れています。容器などパッケージも最近ではなるべくプラスティックを使わずクラフトボックスなどを使い、環境に配慮して、人に優しい、地球に優しいを心がけています。

1月のサロンでは新春ということもあり少しそれを意識し且つ華やかさがあるメニューにしました。黒豆、なます、伊達巻などすべて手作りで…そして「暮らしのアトリエ」のために毎回焼いてもらっている天然酵母のパンに自家製のローストビーフをサンドしました。さらに今が旬で喉に優しい金柑をハチミツ漬けにしてデザートに。他にはワインにあうおつまみを数種類。皆様のお口に合いましたでしょうか。大勢の方々のお好みに…とはなかなか難しいのですが中でもこれが美味しかった！と思っていただける一品があればうれしいです。

「暮らしのアトリエ双子山」主宰　札響くらぶ会員／上野愛

伊達巻となます

ローストビーフサンド

容器はクラフトボックス

次回のご案内

次回の「札響くらぶサロン」は4月19日（日）、18時より豊平館にて開催します。ミニコンサートには札響ヴァイオリン奏者、高木優樹さんをお迎えします。どうぞお楽しみに。参加申込は4月12日（日）までになっています。

有難う　お疲れ様　大平まゆみさん　そしてこれからもね！

あの朝、新聞で大平さんが札響を退団される、しかもＡＬＳという辛いご病気に罹患された旨の会見記事に接し、驚愕と悲しみ、お見舞いとお慰めと励まし、言葉を選ぶことができないもどかしさと深い想いに沈みました。

大平さんが私たちの札響のコンサートマスターとして着任されたのは、市民待望のキタラホールが完成してほどなく尾高さんが常任指揮者にご就任したのとほぼ同じ時期でした。私たち「札響くらぶ」の歴史そのものです。素晴らしい響きのキタラで尾高さんと大平さん率いる札響がより良き音づくり・音楽づくりに格闘する姿を目の当たりにすることができた22年の月日。私たち札響くらぶをはじめ音楽を愛する市民・道民にとって本当に幸せな時間でした。

大平さんのより多くの人々に音楽を届けたい想いと活動は、札響の聴衆者拡大を願う私たちの活動への最大の理解者であり協働者でした。常に札響の看板を背負い、また一人の音楽家としてどんな条件の場所でも音楽の美しさ楽しさを、軽妙なトークに笑顔を添えて奏でてこられました。地下鉄コンコースでの電車入線時、騒音と風圧を浴びながらのコトニクラシック、被災地での鎮魂、障害や病める人々、弱き者へのいたわり。本当に頑張ってこられた、札響のまゆみさん、お疲れ様でした。そして本当に有難う、まゆみさん。以前、仰ってましたよね「１００歳まで弾くからね！」って。時間はタップリ、これからもゆっくりと無理をせずに身体を愛しみながら、聴かせてください、まゆみさんの音楽への愛の調べを。

札響くらぶ会長　上田文雄

ありがとうございました

野口隆信さん　バストロンボーン奏者

あっという間の41年間でした。
マーラーの1番から10番までの
演奏は良い思い出です。

野津雄太さん　フルート副首席奏者

北海道には4年9ヶ月でした。
感謝の気持ちでいっぱいです。
墨田トリフォニーで頑張ります。

「札響くらぶ」の皆様へ　感謝を込めて

病気を公表して札響を退団してから2ヶ月半が過ぎました。毎日が新しい経験で、ずっとすぐ前ばかりを見て暮らしてきたような気がします。

そんな時、札響くらぶの皆様から素敵なメッセージと綺麗なお花が届きました。しばしの間、札響時代の楽しかった日々を思い出すことができました。

21年8ヶ月の間、本当にお世話になりましてありがとうございました。皆様のお顔が懐かしく思い出されます。皆様のあたたかいお気持ちに、札響のメンバーは支えていただいております。今後とも札響の仲間たちをどうぞよろしくお願いいたします。

私もいつかまた皆様と笑顔でお会いできる日を、とても楽しみにしております。

ヴァイオリニスト　大平まゆみ

現代版オペラ「カルメン」を演奏して

1月25日、26日の両日、札幌文化芸術劇場Hitaruにて、ビゼーのオペラ「カルメン」を演奏しました。「カルメン」は、１８７５年に初演されて以来、多くの人にとって親しみのある作品となっており、今日では最も有名なオペラのひとつになっています。

私自身も、初めて「カルメン」を演奏したのは、小澤征爾音楽塾に参加した時でした。当時大学院1年生だった私は、総合芸術ともいえるこの舞台作品を初めて体験し、とても感動したのをついこの間のように覚えています。

「カルメン」はスペインを舞台にした物語なのですが、今回はその舞台をアメリカに移した21世紀版の現代的な演出となり、カルメンの「自由に生きる」信条を、異なる階層のショービジネス界に生きる人間に投影させることで、新たな世界観を広げてくれました。字幕も日本語訳字幕と英語訳字幕が設置され、今回の演出に沿った訳詞内容も大変興味深かったです。

今回、私は小太鼓とタンバリンを演奏しました。「hitaru」のオーケストラピットには初めて入りましたが、普段コンサートホールで演奏するのとは違い、それぞれのプレイヤーとの距離も近く演奏にも、より一層の一体感が増し、とてもエキサイティングな時間を過ごすことができました。素晴らしいキャストの方々、コーラス、そしてエリアス・グランディの指揮で、多彩な音楽が引き出され、オーケストラも触発されて、本番は両日とも、とても素晴らしい「カルメン」となったのではないでしょうか。

（写真協力　札幌交響楽団）

札響打楽器奏者　細江真弓

「カルメン」の打楽器に興奮　マックス！

２０２０年1月25日、札幌文化芸術劇場Hitaruにオペラ「カルメン」を観賞しに行った。指揮者は２０１２年のＰＭＦコンダクティングアカデミー修了生のエリアス・グランディ、オケピットの中はもちろん札幌交響楽団である。

もうこれだけで十分に興奮してしまうが、前奏曲（序曲）が始まっていきなり活躍するのはシンバル（大垣内さん）、トライアングル（大家さん）、ティンパニー（入川さん）など私の大好きな打楽器、開演直後には興奮マックス状態！カルメンのアリアではカルメン本人には絶対に叩けないであろう超絶ロールのカスタネット（真貝さん）、エスカミーリョのアリアでは弱音から強打までと見事な指ロールのタンバリン（細江さん）が登場し打楽器の為のオペラだ‼と思わせる程であった。二階中央席からオペラグラスでパーカッショニストの手元ばかりを観ている私の姿は、他の観客からどう見られているのかちょっと気になる。

１月18日の札響くらぶサロンのミニコンサートで素敵な演奏を聴かせてくれた札響フルート副首席奏者の川口さんのピッコロも会場内に響き渡っていた。サロンではドンホセのアリアをアルトフルートで、ミカエラのアリアをピッコロで見事に演奏してくれていたので、大変勉強になった。

今日のオペラ公演で一番注目されていたのは、21世紀のアメリカショービジネスの世界に舞台を移した大胆な演出であった。私は大変面白く納得して観賞する事が出来たが、否定的な意見の観客も多くいるようだった。それが新演出のオペラの醍醐味だから当然だと思う。観賞し終わって、ものすごく赤と黒を意識してドレスアップした観客が多いなと感じ、オケピットの中に大平まゆみさんが居たらどんなに華やかだっただろうと感じたのは、私だけではないと思った。

オペラはよく総合芸術と言われるが正に地元の札響も合唱団も、そして歌手もダンサーも大活躍していた事は言うまでもない。幕間の休憩でシャンパンを飲んでオペラを語って、ここは札幌かと我に返ると文化都市札幌市民である事を誇りに思う。

会員／上野文博

（写真協力　札幌交響楽団）

ベートーヴェン「第10」の札響初演を所望

令和初の「札響の第９」は旧臘14・15日、札幌文化芸術劇場hitaruにおいて、名誉指揮者尾高忠明の指揮で行われました。キタラよりも約２００多い客席はほぼ満席の盛況で、聴衆に深い感動を与えたことと思います。

クラシック音楽ファンの多くは、「第９」がベートーヴェンの最後の交響曲であると思っておられるのではないでしょうか。「第９」の初演は今から約１９５年前の１８２４年5月7日、ウィーンで行われましたが、ベートーヴェンはこのころから第10交響曲（以下、「第10」と略す。）の想を練っていたようで、１８２２年から１８２５年の間にかなりの数のスケッチを残しています。

「第10」の復元はこれらのスケッチをもとに、これまでに数名の音楽学者が試みたようですが、最近になって英国アバーディン大学のバリー・クーパー博士が、指揮者ウイン・モリスの協力を得て、第3交響曲「英雄」と同じ調性で第1楽章（変ホ長調）の復元を完成させました。アンダンテの中間にアレグロを挿入する様式で、随所にこれまでのベートーヴェンの作品を思い起こさせるメロディの断片や和音が出てきて、終曲に近くホルンがベートーヴェンへの郷愁を奏る1楽章のみの交響曲になっています。

モリス盤「第10」

初演はごく最近のことで約30年前、１９８８年（昭和63年）10月18日ロンドンにおいて、ウォールターウエラが指揮するロイヤルリバプールフィルハーモニー管弦楽団により、初録音は初演に先立つ１９８８年9月8日および13日の両日にわたり、ウイン・モリスが指揮するロンドン交響楽団の演奏によってそれぞれ行われました。このＣＤは市販されており、演奏時間は19分44秒です。日本初演は、ロンドンでの初演直後に、上記のバリー・クーパーが来日して読売日本交響楽団（コンサートマスター岡山潔）を指揮して行われ、日本テレビが放映しています。

「第９」の演奏時間は指揮者によって多少異なりますが1時間10数分、「第10」が約20分とすると、両者合わせて1時間30分あまり、最初に「第10」、ついで「第９」を演奏すれば、時間的にはちょうどいいプログラムになるように思います。ベートーヴェン生誕２５０周年を迎えていずれの日にか、札響の「第９」演奏会に、札響初演の「第10」を付け加えて演奏されるのを楽しみにしたいと思います。

会員／川端習太郎

スタッフの声

▼昔は良かった。今はなんでも便利になりすぎてしまっている。便利さゆえの不便さ。悲しいかな今の時代についていけない。そんな私、ある人達の透き通った声に癒されている。昔にデビューし再活動し始めたグループ。あの方々の歌声を聞いているとなぜか心が落ち着く。（幸）

▼昨年36色の鉛筆を買った。２５０周年の田園の風景を描こうと思っている。何回も聴いたが、すぐに遠い記憶になる。音の鮮やかさを、紙に描けば少しは感動を保管できる。せせらぎでの深呼吸を４楽章分、ポケットに詰め込んでみようと思う、今年こそ。（爽）

▼1月の札響定期、珍しくアンコールがあった。曲も聞き覚えのないもので、モーツァルトの「カッサシオン　ト長調Ｋ63のアンダンテ」だったらしい。カッサシオン、音楽辞典には「多楽章の楽しみ用の器楽曲で、18世紀に流行した」とある。ＦＭでもう一度聴けるだろうか。（村山）